「人の倍働いて、倍遊ぶ」

長岡京市国民健康保険運営協議会会長

野 村　治 之　氏

筍は長岡京市の特産物だ。野村さんはその筍を作り続けて 40 年余りになる。長岡京市の筍がおいしいのは手間暇かけて育てているからで、日がよく当たるように間引いたり、わらを敷きつめたりと、手入れが欠かせない。それが収穫の時期ともなると寝る間も惜しいほどの忙しさになる。多いときは 1 日で軽トラック一杯分も収穫する。

「掘り起こすのも結構な力仕事でいい運動になっています。ごはんも食べないと持たないのですが、健康のことを考えて腹八分目を守るようにしています。畑までの道もなるべく歩くように心掛けていますね。」

野村さんが脱サラして農業を継いだのは 31 歳の時だが、人と同じことをしているだけではいけないと常に考えていた。そこで目を付けたのが古い竹の利用だ。筍農家では定期的に育ち過ぎた竹を処分する必要があるが、多くの農家ではその扱いに困っていた。野村さんはそうした竹を譲ってもらい、農業用や植林用の支柱に自分で加工して売った。

「今で言うサイドビジネスでしょうか。家一軒分ほど稼いだかもしれません。」

時機に適っていたのだと言うが、アイディアを実際に形にしていく実行力も不可欠だ。

仕事一筋かと思いきや、なかなか多趣味な野村さん。30 代から 40 代は社交ダンス、50 代から 70 代は書道、今は絵を描くことが面白いと話す。

「人の倍働いて、倍遊ぶ、ということをモットーにしています。仕事も趣味も熱中すると夜中になってしまうこともしばしばですね。」

社交ダンスの大会では解説を務め、日本画では市長賞を受賞する腕前でもある。本人は謙遜するが、何事においても器用である上、趣味もとことん極めてしまう性格らしい。興味深いのは野村さんの趣味の多くが、奥さんと一緒に始めたものであるということだ。夫婦で楽しみながら、時には切磋琢磨して刺激し合うことが、長続きする秘訣なのかもしれない。

現在持病の糖尿病のため、好きな肉や酒を制限しなければならないのが辛いと言うが、悲観した様子はない。逆にカロリーの低い和食を中心に自分で料理をするという楽しみが増えた。仕事も趣味も興味を持ったら積極的にやってみるという姿勢が、前向きに健やかに過ごす日々につながっている。野村さんからはその時々を、充実して生きてきた人の余裕が感じられた。